



小田高 11 期通信

2011年4月17日発行
第7号

In the center of your heart and my heart, There is a wireless station; So long as it receives messages of beauty, Hope, cheer, courage and power From men and from the Infinite, So long are you young.

東日本大震災の犠牲者を悼む

編集者代表：
今道周雄

2011年3月11日14時46分に三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の地震が発生し、それによって引き起こされた高さ10メートルを超える大津波が岩手・宮城を襲った。同じ大津波は福島、茨城、千葉では、やや波高こそ低かったようだが大きな被害を与えた。小田原でも震度5弱の揺れがおり、文学館の門が倒れたりアリーナのスロープに亀裂が入ったり、など多少の被害がでた。さらに福島第一原発の事故がこの大災害に追い打ちをかけた。放射性物質の漏洩により、原発から20km圏内の住民は退去、20-30km圏内の住民は屋内退避となったのである。

一瞬にして親兄弟あるいは祖父母、妻、夫などの肉親を失い、家も家財も失われた方々、あるいは放射性物質を逃れ、見知らぬ地を流転しなければならなくなった方々の悲嘆はいかばかりかとお察しする。

警察庁によると、東日本大地震による3月29日現在の被害は次の通りである。

人的被害：死者数 11,168人、行方不明 16,407人、負傷者 2,778人
避難者数146,959人（ピーク時360,000人）

住家被害：全壊16,527棟、半壊8,033棟、流失2,165棟、全半焼97棟、
床上浸水2,738棟、床下浸水1,351棟、一部破損115,782棟、
非住家被害：3,486棟

その他被害：道路2,126箇所、橋梁56箇所、河川4箇所、崖崩れ135箇所、
鉄軌道26箇所

残された方々には苦難の道が待ち受けていることであろうが、少しでもそれを軽減するのに役立ちたいと願う日々である。亡くなられた方のご冥福をいのり、被害をこうむった方々には心から慰めを申し上げたい。

(編者)

嗚呼！東日本大震災

3年6組 榮 憲道 sarara@hm8.aitai.ne.jp

- ・ 名古屋にも不気味な揺れの伝い来る巨大地震が列島襲う
 - ・ M 9.0 ! 衝撃映像つぎつぎとテレビの前に呆然と坐す
 - ・ 波頭高く押し寄せ来たる大津波に呑みこまれゆく家並のかなし
 - ・ 仙台は妻の里なり知己多しふるえる指で安否確認
 - ・ 「家目茶目茶、津波迫るも助かりき」受話器の向うは涙にかすむ
- 妻の幼友達でもある従妹の家は海に近い仙台市太白区。大津波で甚大な被害となった若

目次

- ・ 東日本大地震の犠牲者を悼む
編者
- ・ 嗚呼！東日本大震災
榮 憲道
- ・ 皆々様へ
佐々木洋
- ・ 小田原人北村透谷
植田武二
- ・ パソコン事始め
山本哲照

林区荒浜・名取市に隣接しております。

- ・ 茨城の嫁より無事の報あるも停電・余震に不安の一夜

長男は茨城・守谷に家を構え、つくばエクスプレスで東京に通勤しています。東京も計画停電等で混乱は長引きそうです。

- ・ 集落の丸ごと失せし町あまた ^{にえ}贅となりたる人の多さよ
- ・ 瓦礫分け行方知れずの家族呼ぶ残りし者の悲痛な叫び
- ・ 鎮魂 ^{みおつくし}の滲標の鐘鳴らば鳴れ ^{ない}地震に逝きたる ^{みたま}御霊に捧ぐ
- ・ 深刻な放射能漏れ現実に水素爆発相次いで起く
- ・ 最悪のメルトダウンは回避なれ！テレビに向かいひたすら祈る

原発の安全神話は完全に崩れました。

- ・ 小田原も長野も震度5に揺れる次は名古屋か連鎖はつづく

小田原はもちろん私の故郷、そして長野は長男の嫁の故郷です。どこもかしこも・・・。

- ・ 三日かけやっと繋がる妻の ^{いえ}生家は自家発電で炊き出し励む

妻が生まれ育った母の家は仙台市泉区にあり、従弟が農家と造園業を営んでおりますが、精米所、除雪車を備えており近隣を助けておりました。

- ・ この惨に何も出来得ぬもどかしさせめてわずかな寄金に託す
- ・ 力合せ悲しみのとき乗り越えよ！慟哭の町にも春は巡り来

大地震に大津波、そして原発事故と重なった最悪の東日本大震災。被災地に一日も早い復活の日が訪れることを祈念してやみません。

皆様へ

3組 佐々木 洋 hirosHis@peach.ocn.ne.jp

早々にお見舞いメールをいただき有難うございました。

ご心配をおかけしましたが、夫婦とも無事でおりますのでご放念ください。一刻も早くレスポンス・メールをお送りしたかったのですが、停電が続いていました

ので遅くなってしまい、一層ご心配をおかけしてしまっただのではないかと懸念致しております。

実際にヒドイ地震でありました。見ていたTV画面に「宮城沖地震」という表示が出ましたので、「あれ、何でもまた古い字幕が！持ち主に似てテレビまでボケてしまったのか」と思ったか思わなかったのうちに凄まじいビシビシガタガタが始まりました。あれでは、防備を固める時間的な余裕もなく、「予報」としてはおよそ役に立ちませんが、とにかく「大地震」発生を私たちに瞬間に察知させるだけの効果はありした。

よく「とても立っていられる状態ではなかった」などと言われますが、「とても座っていられる状態」ではなく、さすがの重い腰をドンと突き起こされた私たちは即座に”林間地帯”に逃げ込みました。居間と、トイレ、風呂、台所の水回りエリアの間にあって両側に柱が立ち並んでいる廊下状の部分のことです。ここで荒れ道をガタガタ進むバスの車上の柱にすがっている形で見える居間の姿。まるでロデオの荒れ馬にもみくちゃにされている哀れなカウボーイの姿を見ているみたいでした。

ガタピシと軋み音の中で、揉まれ揺すられ歪められる部屋の姿を目の当たりにしながら、全く打つ手なく、ただ自然の猛威に慄然としながらかなり長い時間立ち尽くしていました。しかし、狭い空間を柱で囲まれたお便所は地震凌ぎに格好の場所ですね。もしかして「便りがある所」のは「頼りになる所」の誤りであって、本当は「便所」じゃなくて「頼所」と書くのが正しいんじゃないか…などと揺さぶられながらも考えていました。

…相変わらず駄洒落カタルでノ一気な私でした。

尾籠な話ついでですが、歳をとるとオシッコの切れが悪くなるというところを見ると、今回の地震は相当のご高齢なのではないかと思えます。ようやく停電が治ってPCを叩いている今になっても、時折、大きいもの交じりの余震が続いており、再三作業中断、”林間地帯”への避難を繰り返えさせられています。もうチョイ古稀の私だって、これほど切れ

が悪いということはありませんから、ことによると
卒寿超じゃないかと

…おっと、悪口を書いていたらまた余震がきました。
ひょっとすると、よほど”与信”能力のある”自信”
家なのかも。

オシッコと言えば、昨日の夜は、TVも見られず
本も読めずの“漆黑”状態でしたので、懐中電灯で有
りあわせの餌を摂り一升瓶で水分と酔分を補給して
から、何をすることもできず、早々に床につきました。

但し、“go to bed”と“sleep”とは大違い。間断なく押し
寄せてくる余震の波に far from 安眠。乾電池の
予備もないためラジオも聴けず、この地震の全貌が
分からぬまま、ガタピシウツラガタピシウツラの
不安な一夜を過ごしました。しかし、何もすること
のない夜のことで、さぞかし別の地震を起こして
いた若きカップルも多かったことと思います。これ
で少子化傾向に少しは歯止めがかかったなども。

今朝は、早朝、思いもしなかった新聞配達の足
音。これでようやく、情報途絶状態から脱却でき
る。さすが新聞、社会の公器…などと、日頃悪し
悪し様に言っていたのに見事掌を返していたので
すが、いつもの日経は「地震により印刷工場が
稼働できなくなった」とのことで、代わりに特別
紙面として発行された「福島民友」新聞が入って
いました。そして、その「東日本巨大地震」の超
大見出し、「M 8. 8」の表現や被災者各地の惨
状を映した写真を目にして、「我こそ悲劇のヒー
ロー」と思っていたところが実は脇役に過ぎなか
ったのだということに初めて気が付きました。

しかし、さはさることながら、我が家の惨状もな
かなかのものでした。タンスは倒れ、本棚から本が
飛び散りPCはまさに“瓦礫の下”のクライストチャ
ーチ状態でした。余震による“二次災害”を恐れて室
内の散乱状態の手直しはそこそこにしておいて、先
ずは飲料水の給水を受けに行きました。ガスだけセ
ーフで、水道もストップしていたのです。しかし、
またトイレの話になって恐縮ですが、フン流にはお
風呂の残り湯があって助かりました。これは、ご

近所にも“給水”して差し上げることができて大喜び
されました。たかが残り湯、されど残り湯ですね。
残り湯を“給水”したために“水臭いやつだ”などとご
近所から爪弾きされることもなくなりそうです。

ところが、“給水”を受ける身の辛さ。駐車スペ
ースをようやく探して入っていった消防署の隣の土地
にはそれこそ超長蛇の列ができていました。「自
衛隊第6 なんとか」と書かれている車が停まって
いましたから、私たちはイラク・サマーワの人々と
同じような体験ができるのかと思っていたのです
が、これほどの人数に給水できるだけのタンクをも
ってきているのだろうかと思信半疑。果たして、
1時間くらい並んでようやく100メートルほど進ん
だ頃に、いわき市職員と名乗る若者が現れて、「
ここは5トンのタンクしかありませんので全員に
給水できる保証はありません。情報によると、別
の個所に10トンの水を自衛隊が運んできました
ので、“移動可能な方”はそちらに移られるようお勧
めします」と長蛇の列にメガホンで告げました。

なるべく多量の水を手に入れようとして、ポリ
タンクやナベ・ヤカンなどありったけの容器を携
えてきて、重い水を持ち帰ろうってわけですか
ら、“移動不可能な方”なんているわけはありませ
ん。私たちより遅くやってきて、長蛇の列の最後
に方に新たに加わった連中はともかくとして、長
い線の上を進みあがってきた“歴線”の民は誰ひと
り市役所職員の勧告に従って動こうとしません。
私と同様に、他の給水所に行っても、駐車スペ
ースがなかなか見つからず、またしても長蛇の列の
最後尾に並ばなければならないと思ったからに違
いありません。「それなら、こちらの方に10
トン運んで来れば良かったじゃないか！」と温
厚ないわき市民が怒るのも無理はありません。

ここにも縦割り行政の弊が表われていて、いわ
き市役所と自衛隊の間の意思疎通ができていない
様子でした。かわいそうに思って、「ここで並ん
でいた人が余所で優先して給水が受けられるよう
優先券でも発行すればいいじゃん」と、いわき市

すぐ昨日) 実現致しました。P Cメールを久方ぶりに開いてみて、数多くのお見舞いメールをいただきましたので感謝感激いたしております。と同時に、こちらからのレスポンスが遅れたため、一層ご心配をおかけすることになってしまったと思い、深くお詫び申し上げます。

余震が続く「いわき」を脱出する時(3/14午後3時)は、道路状況も分からず、ガソリンも充分ではありませんでしたので、「行けるところまで行くしかない」という“開き直り”の気持ちしかありませんでした。そこで、海沿いの国道6号線を南下するのには津波再襲来の恐れがありますので、先ずは中通り地区の須賀川に出て国道4号線を下って、当初漠然と目論んでいた通り、那須塩原のホテルに泊まりました。

震災時に温泉入浴とは罰があたりそうな話ですが、久方ぶりの入浴と安眠ができ、ようやく心地がつかれました。思えば、私の古稀の誕生日イブのささやかなお祝いができたのかもしれない。翌朝、運良くホテルの近くのGSでガソリン補給を受けることができましたので、渋滞の中、「12時間古稀記念ドライブ」をして辻堂宅に辿りつくことができました。

下記URLの「還暦記念カナダ・アメリカ西部ドライブ旅行」(小田高健児4名[水口幸治、中沢秀夫、山本哲照、佐々木洋]による3週間9,000kmのドライブ旅行でした)とは全く趣の変わったものとなりましたが、こんな“古来稀なる”誕生日もあっていいんじゃないかと思っています。

<http://www4.ocn.ne.jp/~daimajin/CanadaAmericaDrive3.htm>

教え子の外国人たちが全員帰国してしまいましたので、「佐々木日本語教室」も休眠状態となってしまいました。今後暫くの間は、いわき9:辻堂1という旧来のパターンから一転して、辻堂9:いわき1のパターンになると思います。もちろん、大好きな「いわき」のことですから旧状に戻ることができればと願っています。放射能汚染が軽微でとどまり、皆様を新鮮な魚介類の豊かな「いわき」へお誘いへのお

越しをお誘いできる日の近からんことを切に願っております。

当面のアクセスは以下の通りになります。かなり時間的な余裕もできましたので、なにかとお声掛けいただければ幸いです。

〒250-0047 藤沢市辻堂6-25-7

TEL & FAX 0466-33-1793

なお、一部の皆様には重複になりますが、大地震直後にお送りしたメールを、以下の通り転送してお送りしますのでご笑覧ください。(編者注:前半部分を指す)

草々

2011/4/4 0:42a.m. 辻堂より 佐々木 洋 拝

小田原人北村透谷

3年8組 植田武二

春の彼岸の中日に、小田原市内の城山にある高長寺の白木蓮を妻と見に行った。

例年この頃になると、「彼岸の花」として地方紙に写真入りで紹介される。高長寺には二、三回来ているが、白木蓮の咲いている時期に来たのは初めてである。樹齢およそ三百五十年、高さ十五メートル、幹周り三メートルほどの大木で、枝もたわわに花をつけている。五分咲きだ。小田原市指定の天然記念物にもなっている。

高長寺はJR小田原駅の西口(新幹線側)から数分の住宅街に位置している。この日は参詣者が多く、カメラで熱心にモクレンを撮っている人もいた。

高長寺は、また、明治時代の人で日本近代文学の先駆者、北村透谷の菩提寺としても知られている。寺は立派な鉄筋コンクリート造りの本堂と庫裏があり、割合と広い墓地のほぼ中央に透谷の墓がある。

「透谷北村門太郎墓」、その裏に、「明治二十七年五月十六日死」と書かれている。同じ墓石の右側に、「透谷妻美那子、昭和十七年四月十日七十八歳昇天」と記されている。小さな墓石である。

この墓は、もともとは東京都港区白金台の瑞聖寺にあったが、昭和二十九(一九五四)年五月に挙

された透谷没後六十年祭の時に、ここに移された。

これとは別に透谷の記念碑は小田原城祉公園内の文部省指定史跡、馬屋曲輪跡に建っている。「北村透谷子献す」と、島崎藤村の揮毫によるものだ。この文学碑は昭和四年に市内の大久保神社境内に建立されたのだが、やはり透谷没後六十年祭の時に、現在地に移された。

石碑は黒松の大木に囲まれて、堀に面した静謐な公園内にある。表面は苔むして、高さ三メートル、幅五メートルほどの、赤褐色の見映えのする石碑である。

透谷北村門太郎は明治元年に小田原に生まれた。父快蔵、母ユキの長男である。祖父は玄快といい、小田原藩の藩医であった。小田原藩は、薩長藩閥政治の下で冷遇された。藩医は厳密な意味の士族ではないが、士族と同様の身分であり、いわば門太郎は没落士族の子弟と言っていい。透谷は数え年六歳まで母に育てられ、六歳から十一歳までを祖父とまま祖母に育てられた。父母は透谷を祖父に預けて、東京に移住したのである。やかましい祖父と無頓着な祖母に育てられた透谷の少年時代は、けして心地よいものではなかったらしい。後年透谷を苦しめた気鬱病も、この頃に萌芽したのだろう。

私の家から歩いて十分ほどの、国道一号線に面したバス停唐人（とうじん）町の少し箱根寄りに、「北村透谷生誕之地」という小さい碑が建っている。この石碑の揮毫者は堀越英といい、透谷と美那子の間に生まれた一人娘である。

透谷と、小田原の土着の学者として有名であった私の曾祖父とは、実に目と鼻の先の間の距離にいたのであり、おまけにほとんど同時代人であることを思うと、私には感慨深いものがある。

もともと北村家の菩提寺は、小田原郊外、国府津の先の前川にある長泉寺であった。

長泉寺はJR国府津駅から線路脇を、十七、八分東京寄りに歩いた海沿いの寺である。国府津の小山に抱かれた静かで自然豊かな土地だ。広い境内にはみかん畑があり、線路越しに相模の海が望まれる。透谷は、長泉寺滞在中に『一夕観』、『漫罵』、『万物の声と詩人』などを書いている。島崎藤村もここを訪れている。

透谷の少し年下の明治女学校の僚友だった藤村は、後年『桜の実の熟する時』と『春』で、彼の文学上の出発がいかにか透谷の強烈な影響を受けたかを、つぶさに描き出している。藤村の『春』（一九〇八年）初版の和田英作による口絵には、国府津海岸で語り合う藤村と絶望した透谷の姿が描かれている。しかし、国府津での生活も透谷の心身をよく養うにはいたらず、鬱状態は進んでいった。

透谷は小田原が生み出した唯一の天才、もしくは天才的文学者である。小田原は過去に牧野信一や尾崎一雄、川崎長太郎や北原武夫、また現在では夢枕獏という著名な作家を輩出している。だが、他の分野も含めて天才的と言えるのは透谷だけだ。豊臣秀吉の小田原征伐の時に生まれたあまり名誉とはいえない「小田原評定」などという言葉は、透谷のイメージからはほど遠い。二十七歳で自殺した透谷の生涯は鮮烈であった。

「透谷は日本近代の思想と文学がまだまどろんでいた明治二十年代前半（一八九〇年前後）という時期に、わずかに現れた二葉亭四迷の『浮雲』、森鷗外の『舞姫』という先駆的な二作がなお伴っていた消極的な姿勢を破り捨て、はじめて公然と近代文学の独自の目的・理想と確かな存在理由を明らかにしたのである。」（小田切秀雄）

透谷はこれを『厭世詩家と女性』、『徳川氏時代の平民的理想』、『人生に相渉（わた）るとは何の謂（いい）ぞ』などの鮮烈な文芸評論によって展開すると同時に、それらを通して人間の内面性と思想の領域での民主的自由の追及に道を開き、明治の思想界でまさに最前線に立っていた。

透谷の作品で私が好きなのは、評論である。もちろん、『楚囚の詩』や『蓬萊曲』などの劇詩は、彼の壮大な思考実験であろう。「特に『蓬萊曲』は日本近代の知的混乱を象徴している」（桶谷秀昭）。透谷は時代に対して早く生まれ過ぎたゆえの混乱の最も痛ましい犠牲者であるが『蓬萊曲』はいわばその混乱の痕跡と犠牲者の苦痛を生ま生ましく留めている作品である。

それに比して透谷の評論は、心に快く、また密度の高さを持って響いてくる。ドストエフスキーの『罪と罰』に対する、日本で最も早い、当時の文学者

の水準を抜いた洞察力は驚きだ。それと同時に、透谷のフェミニズムの限界も見えてくる。江刺昭子の『透谷の妻』など彼を女性の立場から見る作品も増えてくるだろう。

だが、時代に挑戦し、人間の本質に迫った透谷の文学作品は、これからも読み継がれていくに違いない。

私は高長寺の白木蓮の下で空を見上げた。鈴なりの花は、白というより象牙色（アイボリー）に近い。透谷の魂のように気品のある鮮やかな花が、春の空に揺れている。私と妻は白木蓮を振り返りつつ、高長寺を後にした。

色川大吉氏はその著『北村透谷』で、愛好する作品の最後に『一夕観、其一、其二、其三』を掲げている。私もこの『一夕観』が殊の外好きなので、「其二」を最後に載せたい。

われは歩して水際（すいさい）に下れり。浪白く萬古の響きを伝え、水蒼々として永遠の色を宿せり。手を拱（こま）ねきて蒼空を察すれば、我れ「我」を遣（わす）れて、飄然として、襤褸（らんる）の如き「時」を脱するに似たり。

茫茫乎たる空際は歴史の醇の醇なるもの、ホームありし時、プレートありし時、彼の北斗は今と同じき光芒を放てり、同じく彼を燭（て）らせり、同じく彼を発（ひ）らけり。然り、人間の歴史は多くの夢想家を載（の）せたりと雖（いえども）、天涯の歴史は太初より今日に至るまで、大いなる現実として残れり。人間は之を幽奥（ミステリー）として畏るゝと雖、大なる現実を始めより終わりまで現実として残れり。人間は或は現実を唱え、或は夢想を称へて、之を以て調和す可からざる元素の如く諍（あらし）へる間に、天地の幽奥は依然として大いなる現実として残れり。



パソコン事始め

7組 山本 哲照 alleinganger@rouge.plala.or.jp

◆はじめに

小田高1 1期通信第6号に「私のウンチク」と題して駄文を寄稿しました。その末尾に私とパソコンとの関わりについて述べ、もしお許しいただけるならそのことについて改めて書かせてほしいと記しました。

◆きっかけは仕事から

私は大学卒業後「日刊工業新聞社」に入社し、はじめの5年間は「神奈川支社」（横浜市）に勤務しました。1969（昭和44）年3月に東京本社に異動し「出版局販売部」勤務となりました。販売の仕事ですからいろいろな数字と格闘することになります。時代の最先端を行っているように思われる新聞社という職業ですが、当時の職場にはコンピュータなどは全く無く、計算は計算尺やベテラン社員のソロバンに頼っていました。異動して数年後によく手回しの計算機が職場に導入されましたが、操作は簡単ではなく余り便利になったとは思えませんでした。更に数年経って電子式卓上計算機、いわゆる「電卓」が登場してきてやっと誰でも素早く正確に計算ができるようになりました。

私の仕事の中でも市販されているコクヨなどのB4判の用紙に30本くらいの横罫線だけが印刷されているものに適当に縦罫線を引き、それに目いっぱい数字を入れてタテヨコの加減乗除の計算をするわけですが、電卓で3回計算しても3回とも答えの数値が違おうと言う有り様で、ほとんど参りました。それが1980年代初期のことでした。

世間ではNECがPC-88シリーズというパーソナル・コンピュータ（パソコン）を売り出していました。値段は確か30万円以上でとてもじゃないが安サラリーマンがおいそれと買える代物ではありませんでした。それにPC-88シリーズはCPUが8ビットで日本語処理に大きな問題がありました。それが1982年16ビットのPC-9801シリーズになって飛躍的に日本語処理が速くなり、普

及も拡大したので値段もそれに比例して下がってきました。

◆職場にワーク・ステーションが来た！

日刊工業新聞社のホスト・コンピュータが日立製だった関係で、その頃私の職場にも日立製のワーク・ステーション（WS）が設置されました。WSと言うのはオフィス・コンピュータ（オフコン）とパソコンの中間に位置するものです。私は日立の指導員がそれを操作するのを見てこれを何とか自分の仕事に生かしたいと思うようになりました。表計算は勿論、データベース、ワード・プロセッサ（ワープロ）など自由自在にできるのが大きな魅力でした。そして自分から志願して1986年8月日立の研修所（品川区大森）で2日間の講習を受けました。しかしたった二日の講習ではほとんど何も得る事がなかったと言うのが正直なところですが、マシンに付随して職場に置かれていた分厚いマニュアルを通勤の電車内で読みまくりました。当時は小田原駅から東京駅までは東海道線、大手町駅から九段下駅までは営団地下鉄東西線を利用していました。その頃の東海道線は朝夕のラッシュ時には小田原～東京間は1時間40分かかりましたから、時間だけはたっぷりあります。そのようにして職場に置かれていたWSを何とか使うことができるようになりました。組み込まれていたソフトの内よく使用したものは「OFIS POL (Problem Oriented Language)」(以後POLと表記)と「OFIS Word」(以後ワードと表記)でした。POLは表計算ソフトですがデータベースとしても利用できました。ワードは文字通りワード・プロセッサ(以後ワープロ)です。私はこの二つのソフトを使って自分の担当する業務は殆ど電子化してしまいました。この頃私が考案して作成した業務上の色々な表や書式は、私が人事異動で職場を離れてからもずっと使われ続けました。当時の出版局でWSの操作(特にPOL)では私は最も習熟した者の中に入っていました。

◆自宅でパソコンを購入

一方パソコンの世界はNECのPC-9801シリーズが市場を席捲し始めていました。NEC以外ではシャ-

ープのX68000シリーズ、富士通のFM・TOWN Sシリーズがありホビー・パソコン御三家と言われていました。シャープがあくまでホビーを迫及したのに対しNECはOS(基本ソフト)にいち早くMS-DOSを採用し、これへの対応が遅れた富士通にビジネス・パソコンの世界で大きく水をあけることになりました。私はこの頃からパソコン購入を考え始めていました。当時ビジネス・パソコンに関心を持つ人々の最大の目的はワープロとしての機能でした。業界もこの傾向を感じ取りワープロ機能だけを拡張した専用機を各社競って発売しました。11期のご同輩にもこの頃に「ワープロ専用機」を購入された方は沢山いらっしゃるのではないのでしょうか？

しかし私は「ワープロ専用機」には全く興味がなく欲しいとも思いませんでした。私が一番興味を持ったのは「データベース機能」と「表計算機能」でした。コンピュータの最もコンピュータらしい機能です。小田高11期通信第6号でお話しした通り私は映画が大好きで、自分だけの映画のデータベースを作りたいとかねがね考えていました。紙とペンで作成するのは大変ですがコンピュータなら簡単です。どんな機種を買えばよいか真剣に検討し始めたのが1987年に入ってからです。その頃は16ビットパソコンがかなり普及しフロッピー・ディスク(FD)も8インチから5インチを経て3.5インチの時代になりつつありました。会社の同僚でパソコンに詳しい者の意見を聞いて当時の新製品NECのPC-9801UV21に決め会社と取引のあった大塚商会から購入しました。本体・モニター・プリンターなど周辺機器を含めて30数万円だったと記憶しています。同時に買ったソフトは「データボックス」(データベース)「Lotus1-2-3」(表計算)「一太郎」(ワープロ)「花子」(図形)などです。それが1987(昭和62)年7月11日のことでした。

◆MS-DOSなどと格闘の日々

私が幸運だったのはパソコンを始めた頃周囲に手取り足とり教えてくれる者がいたことです。会社の同僚(7年後輩)で小田原の出身者ですが、高校は市外の私立高だったので我々との接点はありません。彼からパソコンのイロハを学びました。その中でも

特によかったと思うのはMS-DOS（エムエスドス）の基礎を教えてもらったことです。MS-DOSというのはMicrosoft Disk Operating Systemの略で、パソコンを操作する上での基本ソフト（OS）のことです。現在ではWindowsがそれに当たります。当時の書店にはMS-DOSの解説書がずらっと並びまさに百花繚乱といった感じでした。中には「MS-DOSって何ドスか？」などという傑作(?)な書名もありました。それ程本格的に勉強したわけではありませんので、あまり詳しいお話はできませんし、これから述べることの中にも詳しい方から見れば間違っている事も多々あることと思います。その際は広い心でご寛恕下さるようお願いしておきます。その上間違いを正して頂ければ幸いです。

MS-DOSを最初に学んだおかげで「ファイル」「ディレクトリ」「拡張子」などの概念が大体分り、各種オペレーション・ソフトにまたがって理解することができるようになりました。MS-DOSのコマンドの中でよく使用したのは「COPY」「DIR」「TYPE」などです。「COPY」は自分が作ったデータのバックアップを取る時に使います。当時はメディア（記録装置）としてはフロッピー・ディスク（FD）が一般的でした。いやむしろこれしかなかったと言っても過言ではありません。内臓のハードディスクなどは無論ありません。折角作成したデータを入れたFDが破損したら一巻の終わりです。データのバックアップは絶対に怠ってはならなかったのです。そしてこれらの作業の手間を省くのが「バッチ処理」(BATCH)です。「バッチ処理」というのは、データを溜めてひとまとめにして処理する方式で、よく給与計算などに適用されます。私はMS-DOSを使って簡単なバッチファイルを作って利用しました。「DATABOX」などで作成したファイルのバックアップを取る時、「メモリに置かれたファイルをFDドライブに入れてあるFDにコピーせよ」という一連の処理をMS-DOSでプログラムし、そのファイルに例えば「bak」という名前を付けます。そして実際にコピーを取る段になったら、A> bakと入力するだけでその作業を実行させるというものです。

◆ブラインド・タッチとコントロール・キーの活用

その頃のパソコンはカラーが当り前の現在とは異なり電源を入れてしばらくすると、モニターの真っ黒な画面の左上にA>とだけ表示されます。この状態は「プロンプト (Prompt)」と呼ばれていました。この>の後にコマンドを入力するとそれにしたがって動いてくれるわけです。例えばワープロソフトの「一太郎」を使いたい時はA> jxw、Lotus1-2-3ならA> 123、データボックスならA> DATABOXといった具合です。もっともその前に第一段階として本体のFDのドライブAにそれぞれのソフトが入っているFDを挿入しておかなければなりません。その頃のソフトは何枚かのFDで供給されていました。「一太郎」で文書を作成した後で表計算業務をしたいと思ったら、FDを入れ替えて新たにA> 123とキーボードから打ち込んで「Lotus1-2-3」を起動しなければなりません。「DATABOX」の時も同様です。今のようにマウスでカーソルを操作すればかなり色々な作業ができると言うようなことはなく、すべてキーボードから自分の指で打ち込んでいかなければ事は始まりません。ワープロやパソコンを始める時に最初につきあたる問題は「ローマ字入力」か「かな入力」かでしょう。私は小学生の時から「ローマ字」が得意だったこともあり、迷うことなく「ローマ字入力」を選びました。結果的にこれは大正解でした。なぜかと言うとMS-DOSでコマンドを入力する時はすべて半角英数モードで作業するのでいわゆる「qwerty配列」と言われているアルファベットの配列を覚えざるを得ないのです。そしてキーボードは見ないで画面だけを見てキーを打つと言う「ブラインド・タッチ (blind touch)」も必死に練習しました。何回間違えても正しく画面に表示されるまでキーボードは見ないで打つと言う動作を繰り返して行くうちに、ある日突然できるようになりました。その時の嬉しさは今でもはっきりと覚えています。但しすべてのキーをブラインドで打てるという域には未だに達していません。特にファンクション・キーと言われる一番上部にあるF1からF12までのキーは全く苦手です。皆さんが「ローマ字入力」や「かな入力」でカタカナや外国語に変換したい時には多

分これらのファンクション・キーを使っておられることでしょうか、私はこれが殆どできません。その代わりにコントロール・キーを使います。例えば「ABC」と表記したい時、ローマ字で「abc」と打って変換する前に「ctrl」キーと「p」のキーを同時に押します。すると最初は多分「abc」と表示されるでしょう。その時はもう一度「ctrl」キーと「p」のキーを同時に押せば「ABC」と表示されます。これは一例ですがコントロール・キーはその他にも色々利用できるので大いに重宝しています。

◆日本語入力について

パソコンで作業をする時に最初に決めておくべきことは「FEP（フェップ）」をどうするかということです。FEPというのはFront End Processorの略で日本語入力機能のことです。コンピュータで作業をする際にコンピュータの「一番前（即ちフロントエンド）に置いておく」機能と言う意味でこう呼ばれました。単に「FP」と言うこともあります。ワープロソフトは文字通り文書作成のソフトですから起動すれば自動的に日本語入力ができ、漢字などの変換もすぐにできます。しかし「1-2-3」や「DATABOX」は起動したままの状態では半角英数しか入力できません。日本語を入力する時は専用のソフトを起動する必要があります。勿論そのソフトに付随して用意されている日本語変換機能を使えばよいわけですが、パソコンを使っている方ならよくご存じだと思いますが、ワープロ・データベース・表計算などのソフトを用途に応じて使う時に、共通の用語や人名、或いは国名、地名などが頻繁に出てくることがあります。それらの共通用語を各ソフトの日本語変換機能ごとに処理して行くのは、「二度手間」「三度手間」になりいかにも面倒です。一つの日本語処理機能を使えば作業は一挙に楽になります。それを解決するのが「FEP」です。各ソフトで共通で使う日本語処理機能をあらかじめ設定しておくのです。当時一番よく使われたのは「一太郎」の日本語処理に使用された「ATOK（エイトック）」でした。バージョンアップするたびに「ATOK1」から「ATOK5」と後ろの数字が増えて行きました。私が「一太郎」を使い始めた頃の「ATOK」のバージョ

ンは確か5だったと記憶しています。「ATOK」はバージョンがアップするにつれてAI（Artificial Interigence: 人工知能）機能を持たせて相当優れた変換処理ができるようになりました。

日本語変換ソフトには「ユーザー辞書」と言うものが用意されていて、よく使う用語を登録しておくことができます。例えば私の名前は「山本哲照」（やまもとさとあき）です。姓の方は「やまもと」と入力すれば「山本」か「山元」しかありませんから多くとも2回変換すれば出てきますが、名前の方は「さとあき」と入力して何十回変換しても恐らく「哲照」とはならないでしょう。その場合「哲」と「照」に分けてそれぞれ何回か変換して目的の「哲照」にたどり着くのが普通のやり方です。その時に大いに役立つのが「ユーザー辞書」に「単語登録」しておくことです。私は「ユーザー辞書」に「山本」は「y」「哲照」は「s」で登録しました。「ys」と入力して変換キーを押せば「山本哲照」と変換されます。

◆データベースには用語の統一が不可欠

表計算でもそうですが、データベースを作成する時はその中で使用する用語の統一が不可欠の要素になります。数百・数千のデータの中から特定の文字を抜き出したり、ある条件に従ってソート（sort: 分類、並べ替え）するときなど文字の表記がばらばらでは正しい処理ができません。私が作成中の「外国映画」のデータベースから一例をあげてみると、アメリカの俳優「James Stewart」が出演している映画を検索する場合、その名前を「ジェームズ・スチュアート」「ジェームス・スチュアート」「ジェイムズ・スチュアート」「ジェイムス・スチュアート」「ジェームズ・スチュワート」「ジェームス・スチュワート」「ジェイムズ・スチュワート」「ジェイムス・スチュワート」或いは名前と姓の間を「・」ではなく「-」や「:」にしたり一字分スペースをあけるなど、ばらばらではソフトはそれぞれを全く違うものとして認識します。従って彼が出演している映画が私の作成した「外国映画」というファイルの中に仮に50本あったとしても「ジェームス・スチュアート」で検索した結果がゼロつまり1本もなかったということになります。私は彼を「ジェームズ・スチュアー

からです。これ以外の表記で検索しても一本もヒットしません。そしてコンピュータでのこういう原則をよく理解していても、実際に入力する時に「James Stewart」を以前にどういう表記にしたかよく覚えていないと言うことも起こり得ます。その場合以前のデータをすべてさかのぼって探して確認すると言うのはいかにも非能率的です。その時に「単語登録」が大いに役立ちます。「ジェームズ・スチュアート」を例えば「j s」として登録しておくのです。そうすれば作業は楽になりデータとしても統一され、検索やソートでも混乱は起こりません。「A T O K」から「I M E」(後述)に引き継いだ私の「ユーザー辞書」には24年間にわたって蓄積した用語がたくさん詰まっています。

※この稿でお話した「検索」や「sort」に関する記述は私がコンピュータを始めた頃の話で、当時は確かに厳密にあてはまるものしかヒットしませんでした。現在は「あいまい検索」などという言葉もあるくらい、それほどピッタリとあてはまらなくてもヒットするかもしれません。この件でお詳しい方がおられましたらご教示頂けると幸いです。

◆時代は Windows に！

1990年代半ばになって Windows の時代になり「一太郎」と「Lotus1-2-3」はマイクロソフト社の「Word」と「Excel」にシェアを奪われました。日本語変換ソフトも「Word」で使われている「I M E」にとってかわられました。Windows が初期の頃はマイクロソフト社も「一太郎」や「Lotus1-2-3」のユーザーから自社のソフトに乗り換えてもらうために、データや使い勝手などにより互換性を持たせていました。例えばワープロソフトに「Word」を選んでも「一太郎」のファイルをそのまま読み込むことができたり、日本語変換に「A T O K」をそのまま組み込んで使うことができるようになっていました。また「Excel」でも同様に「Lotus1-2-3」のファイルをそのまま読み込んで作業することができるようになっていました。

しかし Windows が OS の主流になり「Excel」と「Word」がそれぞれワープロと表計算の主役になるとそれらの機能はいつの間にか無くなっていました。

ト」として統一して入力しているた。機 機能が無くなっても「一太郎」や「Lotus1-2-3」で作成したファイルは読み込むことが可能だった時にそれぞれ「Word」と「Excel」のファイルとして変換して保存すれば、蓄積したデータは無駄にせずに残すことはできました。「A T O K」で作成した「ユーザー辞書」もテキストファイルに変換しておけば「I M E」で読みこんで、若干例外はありますが、そのまま「ユーザー辞書」として使用することができました。私が現在パソコンで作業する時に使用している「I M E」の辞書に登録してある用語は殆ど「A T O K」の時代に登録したものです。

◆データベースの移行では苦戦？

以前に「一太郎」や「Lotus1-2-3」で作成したファイルはそのまま残すことは出来ましたが、「DATABOX」で作成したデータベースのファイルを残すことには苦労しました。ファイルの数そのものは「外国映画」「日本映画」「住所録」など多くはありませんが「外国映画」の件数は数千件もあり、ファイルとしては膨大なものでした。前稿(11期通信第6号)で記したとおり、「DATABOX」は Windows に適応できず、このままではせっかく作ったデータが無駄になってしまいます。他のソフトにデータを変換して残すしか方法はありません。ここで MS-DOS で培った知識が役に立ちました。いろいろなオペレーション・ソフトに共通して読み込むことができる「テキストファイル」や「カンマファイル」に変換して保存しておけばよい、ということを知っていたからです。「DATABOX」で作ったファイルをすべて「テキストファイル」と「カンマファイル」に変換しておきました。そしてマイクロソフト社のデータベースソフト「Access」でそれらのファイルを読み込んで「Access」のファイルとして保存しました。但し、「Access」は操作がかなり難しく、使い勝手も私にとってはよくありませんでした。しかも何回目かのバージョンアップの時、日本語入力がとてもやりにくくなったことがあり、それ以来あまり使わなくなりました。したがってデータの件数もあまり増えていません。ただ、いつでも入力できるように「メモ」のような形でデータそのものは残して

います。

◆インターネットと E-mail

ここまで縷々述べてきたとおり、私はパソコンでいろいろなデータをこねくり回すこと自体が好きで、一旦テーマを見つけると一日中パソコンと向かい合っている事も苦になりません。特によく使うソフトは「Excel」です。殆どこのソフトで片づけることができます。

私は2001年10月から2005年3月まで11期の同期生望月郁文さんの依頼により「社会福祉法人宝安寺社会事業部」と「宗教法人宝安寺」の仕事をお手伝いすることになり、「小田原愛児園」（保育所）の園長室で執務しました。この時も担当した仕事は全部「Excel」で処理しました。法人の予算・決算などの表、職員の名簿、出勤簿、お寺の檀家の住所録等々です。

こういうことにはとても興味を持っていましたが、Windowsの時代になって多くの人が始めたインターネットやE-mailなどには関心がありませんでした。別に知らなくても構わないんじゃないかと思っていました。それがある出来事によって間違った考えであると思ひ知らされました。

私は「丑寅辰巳会」という会に入っています。詳しい説明は省きますが、毎年熱海の「ホテルニューさがみや」で泊りがけで親睦の飲み会を開いています。1997年7月の例会の時にメンバーの同期生水口幸治さんと辻秀志さんの会話を聞いて驚きました。この二人もパソコンを始めていてお互いのメールアドレスを交換していたのです。ちょうど「Windows 95」の時代でした。95はそれまでと違って一段と使い勝手がよくなり、飛躍的にユーザーを拡大していました。私はインターネットもE-mailも知らなくても「ま、いっか？」と思っていたのが間違いだったと、その時気付きました。パソコンを始めたのは彼らよりも10年近く先行していましたが、ことインターネット環境に関しては完全に後れを取っている事に愕然とした、と言っても過言ではありません。熱海での一夜が明けて帰宅した私はすぐに行動を起こしました。自宅の電話回線をアナログ回線からISDNに切り替え、プロバイダーと契約し、

Windowsに詳しい小田高の後輩に依頼して自分のパソコンにインストールしてもらい、1997年8月1日からインターネットを始めたのです。自宅にパソコンを導入してから10年が経過していました。

◆結び

現在はパソコンで収入を得るような仕事はしていませんが、初心者からの依頼は時々あり、私も自分の勉強になるのでできるだけお引き受けするようにしています。望月さんのところで仕事をしている時は、何人かの保育士（保母）さんからパソコンのトラブルの相談を受けました。つい最近も妹の依頼を受け、家まで出かけて行ってレクチュアをしてきました。妹は税理士で自分の仕事はJDLの専用機でこなしていますが、パソコンは全く素人です。一から教えているうちに「これはとてもじゃないが、兄貴から気の向いた時教えてもらうだけでは埒があかない」と気付いたのでしょう。小田原市内のパソコン教室に入会して、本格的に勉強を始めました。私が追い越されるのは時間の問題かもしれません。

末尾に私が今までに購入したパソコンの製品名と購入年月を記しておきます。

| | |
|----------|-----------------------------------|
| 1987年7月 | NEC PC-9801 UV21 |
| 1993年7月 | EPSON PC-486GRS3 |
| 1994年2月 | EPSON PC-486NAS2 |
| 1996年3月 | FUJITSU FMV-DESKPOWER SE DPSE7 |
| 2000年10月 | FUJITSU FMV-DESKPOWER M5/807 |
| 2003年2月 | FUJITSU FMV-C600 |
| 2009年8月 | TOSHIBA dynabook:TX/66J2BL |

短 信

訂正とお詫び

第6号に掲載した「私のウンチク～アメリカテレビドラマと映画のこぼれ話～」の中に誤りがありました。それはヒッチコックの「北北西に進路を取れ」の主演俳優の名前で、「ジェームズ・スチュアート」ではなく「ケイリー・グラント」でした。ジェームズ・スチュアートがヒッチ作品の常連なのでつい筆の勢いで間違っていました。訂正してお詫びします。ゴメンナサイ。

7組 山本 哲照

編集後記

今回はなかなか原稿が集まらず、どうやって編集を始めようかと思いついていた矢先に突然大地震が起きました。真っ先に思い浮かんだのが佐々木洋さんは無事だろうかということでした。(他には東北在住の方が思い浮かびませんでした。)

早速お見舞いメールを出したところ、ユーモアを交えた元気な返信を頂いたのですが、その直後から福島第一原発のトラブルが深刻な様相を呈しはじめました。いわき市にも放射性物質が検出され、どうされるのだろうかどハラハラしていたところ、「脱出」したとのメールを頂きほっとしました。

大地震は東海・南海に起こると予想されていたのに東北で起こってしまいました。地震の予知は人知の及ぶことではないのかもしれませんが、しかし、原子力は人が作り出したもの、そのコントロールは人知でできなければなりません。一刻も早く収束してほしいものです。

榮さんからは以下のコメントとともに原稿を頂きました。

「何回も寄稿して、しばらくは”お休み”するつもりでおりましたが、今回の未曾有の大地震とその惨禍に、冒涇とも非難されそうですが、ついでいくつかの歌を詠んでしまいました。」惨状をみておもわず歌を詠むことは決して「冒涇」などではなく、誰もが感じたことを短歌に凝縮して頂けたのだと思います。

植田さんと山本さんからは心休まる話題を提供していただきました。植田さんは『小田原北村透谷』と題した私家本を出していて、それを11期通信に載せる許しを頂いた訳ですが、私は本を頂いてすぐに高長寺へ行って見ました。1月末でしたからまだ花は咲いていませんでしたが、木の太さに驚きました。

山本さんは映画の話に続いてパソコンの話題ですが、その傾倒ぶりに感心させられます。わたしもパソコンとの付き合いは長いのですが、未だに一本指でキーをたたいています。

さて、次は第8号となりますが、10月末までに原稿を送っていただきたいと思っています。本当に数行のメールでもよろしいので、できるだけ多くの方からの寄稿をお待ちしています。

今道 記